

ハンターさんオラリオ
へ

ガイジ・ジーガ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

題名の通りである。それ以上でもそれ以下でもない。

目次

ハンターさんオラリオへ	1
2nd	8
2nd G	12
2ドス	19

ハンターさんオラリオへ

「……………」

ハンターである男は心底困り果てていた。ついさっきまで歴戦古龍三連続を撃破し、ジェスチャーの軽快なダンスをしていたら、いつの間にか見知らぬ洞窟にいるのだ。新大陸の新たなエリアならば嬉々として突っ込んでいくのだが、ここは新大陸ですらないかもしれない。理由としては何か雰囲気明らかに違うからという、要は勘である。

マツプを開くが、マツピングすらできない始末だった。モドリ玉使えば戻れるだろうかとも思ったが、そもそもキャンプ場があるかどうかすら不明で、メルノスが来てくれるかも怪しい。要は詰みである。

しかし男はこんな事で諦め切れるような人間ではない。そもそもこんなので諦めていたら、ゼノ・ジーヴァより強い歴戦ボルボロスなんて倒せない。とりあえず男は一度領き、この謎の洞窟の出口を目指す事にした。

歩を進めながら周りを探索する。鉱脈があればピツケルで掘るのはハンターならば当たり前的事である。しかし、鉱脈らしき物もなければキノコもなく、環境生物もいなければ草一本もない。何ともまあバゼルギウスよりも糞みたいな場所である、と男は思

いながら舌打ちした。

しかし男はふと思いつく。もしかしたら破壊して新たな道が開かれるタイプのものではないかと。古代樹の濁流しかり、ネルギガンテの寢床しかり、破壊する事で新たな道が開かれるのだ。

そうと決まれば男の行動は早い。大タル爆弾を用意して壁に一直線である。脆そうな壁の付近に大タル爆弾を二つ設置して離れ、そこらに転がっている石ころをスリンガーへ装填する。あとは起爆させるだけである。男は腕を上げて構え、大タル爆弾に向けてスリンガーに装填した石ころを発射した。

大タル爆弾はある程度の刺激を受けると爆発するタイプの物である。しかし驚く事に、小型モンスターの攻撃ではいくらやっただけで爆発しないのだ。それなのにハンターの蹴りや石ころ当てただけで爆発するとは……。一体どのような原理なのだろうか？

爆発の衝撃によってひび割れた壁は崩壊し、中を晒した。ビンゴである。壁の中には見た事のない鉱石があったが、素材としては申し分ない頑丈さで、更には換金アイテムの黄金の欠片や塊がゴロゴロ出てきた。気分はウハウハである。イビルジョーを一方的に殴り続けて無傷で勝利した時くらいウハウハである。

男はポーチへと鉱石を全て入れ、再び出口を探索し始めた。途中、壁が割れてそこからおとぎ話で出てくるようなモンスターが出現した時はとても驚いた。ゴブリンやら

ミノタウロスやら、空想上のモンスターと戦える日が来ようとは夢にも思わなかった。まあドスジャグラスより弱つちかったが、そもそも大きさも馬力も違うだろう。しかしながらゴブリンよ。石ころスリンガーごときで死ぬのは何とかならないか？そして剥ぎ取りで魔石という換金アイテムが出た瞬間、灰になつて消滅してしまうのも何とかならないか？

そういう色々と考えているうちに、見慣れない格好をした人間の集団に遭遇した。何故だかあの集団も足を止めて男を凝視する。

さて、ここで今更ながら男の格好を確認しよう。現在男はカスタム強化したウルズィシリーズを装備し、武器はヴアルハザクのハンマーの最終型の『デモナスの禍根』である。どっからどう見ても死神か何かには見ええない。

「新種のモンスターか!？」

集団の一人が武器を構え、他の者達も武器を構えた。男も「えっ、どこどこ!？」と言わんばかりにキョロキョロするが、周りにモンスターらしきものは影も形もない。そこで男は気付く。「あれ？もしや私がモンスターに間違われているのでは？」と。全くもつてその通りである。

男は自分がモンスターじゃない事を説明するために会話を試みた。

「■■■■■■■■?」

「な、何だ!? 詠唱か!？」

これはどういう事だろうか? あちらの言っている事は分かるのに、こちらの言語はあちらには通用しないらしい。共通語の筈なのだが……。

と、そうこう考えていると、一人が矢を放っていた。しかも見事に顔面直撃ルートである。回避、否、死……! まさかゼノ・ジーヴァ以下であろう連中に冥土送りされる日が来ようとは。男はハンターとなった日から死ぬ事は覚悟していた。故に恐怖はほとんどなかった。あるとすれば受付嬢の食費は誰が払っているのだろうという疑問のみである。いや、これは未練であつて恐怖ではなかった。

カツン…

「なっ!？」

「……………?？」

顔には当たつた。しかし、矢は刺さる事なく鎧に弾かれてしまった。

これまたどういう事だろうか? いくらウルズγが頑強であろうと、矢ならばつ刺さるものなのだが。男は落ちた矢を拾い上げ、驚愕した。

「えっ、何これちっちゃ!？」と。

こんなのではモスやケルビどころかランゴスタを狩るのにも時間がかかってしまうし、ドスジャグラスを狩る事などもはや絶望的である。いくら防具を一切装備しない変

態ハンター達でも、武器くらいはちゃんとしている。

あの人間達はモンスターをナメているのだろうか？いくら貧困地域でもハンターナイフやボーンククリ、弓くらいはあるものである。とうかなければモンスターに狩られる。それ以下の装備となると、かなりのものだ。とうかハンターが一人もいない場所など聞いた事もない。

そう思考している間に、いつの間にか三人が武器を振りかぶって目の前にいた。今度こそまずいと思い、少しでも生存率を上げるために両腕を盾代わりにした。

ガギャンツ！

しかし結果はご覧の通り、相手が弾かれるだけでこちらは無傷である。ハンターナイフ以下とは恐れ入った。

「くそっ！ダメだ！全然効かねえ！」

「ここは下がって報告に戻りましょう！」

そう言つて退却する集団。報告に戻るといふ事は、少なくとも彼らの集落に行くといふ事だ。これは追跡して誤解を解かなくては。男は強走薬を飲み干し、その効果でスタミナが減少しにくくなり、長距離を走る事が可能になる。さあ、追いかけてこの時間だ。

「追つてきたぞ！」

「何かもう逃がしてたまるかと言わんばかりの気迫が！」

「■■■■■■■■■■！(話を聞けい！)」

見失ってしまった。しかしながらようやく出口に辿り着けた。が、更に悩ましい事態が彼を襲った。全く持つて知らない街である。しかもここまで活気のある街は見た事がない。せいぜいが村の祭りに他の村の者が来て賑わう程度である。今男は適当な場所に腰かけ、両手を組んで肘を膝に乗せて頭をがつくしと下げている。どんよりとしたオーラは酷いものである。

「おい、あれってモンスターじゃないのか？」

「いや、モンスターがダンジョンの外に出る訳ないだろ。趣味の悪い冒険者だろ」

趣味が悪いとは中々言ってくれるな貴様。八つ当たりでハンマーでホームランかましてやってもいいんだぞ？

男はそう思いながらも動く事はなかった。ただただがつくしと項垂れているだけである。これからどうすればいいのだろうか？生肉があるから当分は食料に困らないが、寝床がない。ハンター故に野宿には慣れているが、街中でそれは色んな意味でキツイ。宿を探さねばなるまい。しかしこちらの言葉は通じないがために、多分無理だ。本当に

どうしたものか。こんがり肉うめえ。

「鎧の上から食ってる!？」

「どうなってんだ!?!どうやってんだ!?!」

これくらいハンターなら普通である。というか、これができなければハンターになれやしない。

しかしこれから本当にどうすべきだろうか。こんがり肉をたいらげた男は立ち上がり、とりあえず適当に歩く事にした。適当に歩けばイベントでも発生するだろうと思っただからだ。

「頼む！僕のファミリアに入ってくれ！」

無駄に胸の大きな少女がそう言う。どうしてこうなった。

2nd

「……………」

ヘファイストスは窓の外を眺めていた。あの神友が一言だけ言い残して失踪し、かれこれ数ヶ月は経つ。

『ごめんヘファイストス！新しく眷族の子ができたんだけど、その子の都合でしばらくオラリオを離れる事になっちゃったんだ。借金してるからって夜逃げとかそういうんじゃないぞ?!本当だから!』

そう一方的に言つて、こっちが呼び止める暇もなく走り去ってしまった。今彼女は一体何をしているのか知るすべなどなく、ただ溜め息を吐くしかなかった。

「……………」

しばらくボケーっつとしてっていると、何やら外がかなり騒がしくなってくる。何だろうか、トラブルという訳ではなさそうだが、それにしても尋常ではない騒ぎだ。ヘファイストスは自室から出て、その騒ぎの元凶の元へと向かい……

「やあ久しぶりだねヘファイストス！すっかり遅くなっちゃったよ!」

「ぶばっ!?!」

ひよっこり帰ってきたヘスティアが、金色の竜の素材のトンでもねえ装備を着込んでいたのであった。

「…それで？貴女は今まで何処にいたのよ。ついでにその装備は何なの？私でも全く見た事がない素材なんだけど……」

先程はたまらず思いつ切り吹き出し、更には現在ヘスティアが身に着けている装備がトンでもない代物であるせいで、既に疲労困憊なヘファイストス。ついでに彼女の横に腕を組んで立っている男性も、外見の装備とは裏腹に凄まじいオーラを放っている。鍛冶の神だからこそ分かる。あれは絶対に外見だけを変えて、フルフェイスの甲冑姿にしているだけであると。

「うーん…話す事がありすぎて、どこから話したものかなあ」

ヘスティアは悩ましそうな表情で頬を掻いて唸る。

「最初から話すとなると時間かかるし、かと言ってちゃんと話さないと分からないし

……」

「時間かかってもいいから最初から話しなさい」

「あつ、そうかい？それでいいならちゃんと言えよ。でもその前に、僕の眷族になつてくれた子を紹介するよ」

ヘステイアがそう言うのと、横にいた男性が頭を下げた。

「ハンター、つまり僕達で分かりやすく言うと、異世界の冒険者のブニくんだ！」

「」

ヘファイストスはフリーズした。

「原因は今の所分らないけど、彼はこのオラリオに迷い込んでしまつてね。偶然にも僕と出会つて眷族になつてくれたんだ。その際に発動したスキルで、オラリオと彼の世界を行き来できるようになつたんだよ」

「」

ヘファイストスはフリーズし続ける。

「いやーあつちの世界は凄かつたよ！^{ファルナ}恩恵無しでこつちの冒険者と同じように戦う子が

沢山いたんだ！しかも訓練を積めば誰でもつて訳じゃないけどハンターになれるんだ！もちろん今僕が着てるこれも、ハンターとなつた僕が自分で素材を頑張つて集めて

作つた物なんだ！」

「

ふんす！とドヤ顔を決めるヘステイアと、フリーズし続けるヘファイストス。

「そうそう！あつちの世界で手に入れた鉱石なんだけど、こつちで使えないかな？ ついでに君に借金してた分も返そうと思うんだ！」

「いやちよつと待ちなさい。お願いだから待つて。情報量が多すぎて頭がおかしくなりそうだから待つて。順を追つて話して」

フリーズから起動したヘファイストスの発した言葉は、何とも弱々しいものだった。

2ndG

「さて、僕とブニくんの出会った経緯を大雑把にまとめると……」

・小腹が減ったハンター売店に寄る。

・そこはヘステイアがバイトしてるじやが丸くんの売店。

・ヴァリスなる通貨を持ってないハンター、黄金の欠片を変わりに出す。

・大変嬉しいが、とてもではないが受け取れないと慌てるヘステイア。

・「これくらいしか金目のものがない」と、言葉が理解される訳でもなくついそう言うハンター。

・「え？色々と禍々しいけど、そんな立派な装備をしているのに冒険者じゃないのかい？」と返すヘステイア。

・「私の言語が理解できるのか？」

・「オウイエ」

・「やったぜ」

「以上！」

「いや大雑把すぎいい！」

「分かりやすくもいいじゃないか！それとこの後はファミリアに入ってくれってブニくんは土下座したよ！ついでに通訳がいないと君も困るだろうって言って足に縋り付いて泣き喚いたぜ！」

「ヘステイアアツ！何やってんのよヘステイアアツ！私恥ずかしいわよ！」

何とも騒がしい会話だ。しかしながら楽しそうだからヨシ！ハンターことブニはそう思いながら、自身のノートにヘファイストスの情報を書き込む。『赤い髪の男装の麗人ヘファイストス。鍛冶の神であるが、神ヘステイアと話している時は何だかポンコツ臭がする』。

「はあつ…はあつ…：：：貴女がまともに説明する気がないという事が良く分かったわ……」

「まあまあ、あくまで出会った経緯だけだよ大雑把なのは。……ここからは本当に真面目に話すよ」

「……！」

いきなり雰囲気が変わったヘスティアに驚くヘファイストス…とブニ。

「いや何で君も驚くんさい?」

「先程まで巫山戯ていたのに、いきなり雰囲気が強力な大型モンスターと遭遇した時みたいになるからですよ」

「それだけ真面目な話しだからだよ。君だってフワフワクイナを見付ければ真面目になるだろう?」

「なるほど。でもそんなに雰囲気変えると、相手が風邪引きますよ?」

「う、うるさいぞブニくん! いいじゃないか久しぶりにヘファイストスに会えたんだから!」

「……あの、早く話しを進めてくれない?」

「ハッ! ……んん、っ、ごめんよヘファイストス。ここから先はブニくんのスキルの話しになるからね」

「……それ、本当に私に話していいの?」

怪訝な表情で聞き返すヘファイストスに、ヘスティアは頷いた。これが他の神であるならば、きつと話す事はなかっただろう。……いや、どうだろうか。少なくともミアハとタケミカツチの二人には普通に話しそうである。

「ブニくんを眷族にした時に発現したスキルにこういったものがあるんだ」

スキル：大陸移動ワールドマップ

翼竜を使い、オラリオと新大陸を行き来する事ができる。ただし狩猟中は使用不能。神ヘステイアの神血イコルを受け入れた新大陸のハンターは全員が使用可能。

「言つてしまえばブニくん一人…いや、僕の眷族になつた新大陸のハンター一人いれば、いつでも異世界に行く事ができるスキルだよ」

「……これ、本当なの…?」

「嘘じゃないさ。それにヘファイストスなら僕とブニくんの装備を見れば、オラリオで作られたものじゃないって分かるだろ?」

「……ええ、嫌というほどに分かるわ」

信じられないが、認めるしかない。それがヘファイストスの出した答えだ。ここまでモンスターの素材をふんだんに使うというのは、到底ドロップだけで作れるものではない。言つてしまえば、「モンスターの死体が残っていなければ作る事はおろか、現在のオラリオの加工技術では再現不可能」なのだ。きっとヘステイアのいう異世界では、モンスターは死亡しても灰にならないのだ。だからこそモンスターの素材を活かした武器を作る事ができると。

「……………」

それはそれとして、鍛冶神であるヘファイストスには悔しいものがある。例え素材が

あってもここにある鍛冶道具だけでは作れない。自分が本気を出せば別かもしれないが、それでもヘスティアが現在装備している武器全てを再現するには相当な労力と時間が必要だろう。下界に降りている状態では尚更だ。

「あー…そんなにまじまじと見られると、流石にちよつと照れるぜヘファイストス」

「主神ヘスティア、多分武器を見ているのだと思いますが」

「………………。知ってるよそんなコト」

「拗ねないで下さいよ。こんがり肉食べます?」

「ブニくん僕の事バカにしてるよね? ルナティックアローで射るよ? ゴールドルナシリーズでも攻撃力特化してるからね? 痛いじゃ済まないからね?」

「ドラゴン装備は確かに龍属性に弱い。でも私に勝てるでもお思いで?」

ブチッ

「やってやろうじゃねえかコノヤロウ!!!」

「ちよつ、私の部屋で暴れないでくれる!」

「それにしても本当に凄いわ！弓を中折りにする発想だけでなく、放った矢に魔剣のよ
うな属性も持たせるなんて！というかこの矢筒は何なの？いくらでも矢が出てくるん
だけど？矢というより短槍みたいな大きさだけど」

「ごめんよへフアイストス、その矢筒に関しては全く分からない。もうそういうマジッ
クアイテムって事で納得してくれ」

「貴方の持っている武器も凄いわね！ガンランスだったかしら？こんなのもう小型の大
砲じゃない！頑丈さもそうだけど、これを作ろうと発想した子に是非とも会ってみたい
わ！」

「oh…」

キヤーキヤー言いながらヘステイアとブニの武器を見るヘフアイストス。先程とは
違い、その姿は正に新しい玩具を与えられた子供そのものである。

「主神ヘステイア、神へフアイストスとはこのような残念な方なのですか？」

「うーん…多分武器関連では残念になるんじゃないかな？へフアイストス、どうせだし
僕のゴールドルナシリーズ見るかい？あとついでにスリンガーっていうのもあるんだ

けど」

「見せなさい！というか見せてお願い！」

ブニはノートに付け足した。『鍛冶神へファイストスは武器を前にと残念美人になる』と。

2 ドス

日が暮れるどころか翌日の更深夜になつてからヘステイアとブニは開放された。ヘステイアとドスだけでなく団員達も一緒に見てしまったのが悪かつたのだらう。そして疲れ切つてゲツソリしている二人をヘステイアは見ても、流石に申し訳ないと思つて解放した。団員達からまだ見せてくれ！せめてその装備を置いていつてくれ！等ふざけた事を言う輩がいたが、無視してさっさと出て行つた。

「おおう……朝日が眩しいぜ……」

「……流石に腹が減りましたね」

二人の腹からまるでイビルジョーの咆哮が如き音が響いた。こんがり肉を食べれば直ぐに満腹になるが、どうせならアステラやセリエナの料理長が作るような旨い飯が食べたい。幸いにもノヴァクリスタルをヘステイアがかなりの高値で買い取つてくれたので、懐にはかなり余裕がある。暴飲暴食しても一年以上は持つであろう大金だ。

「うーん……何処か美味しい飲食店は……」

キョロキョロと周りを見渡すヘステイア。ブニはオラリオの文字は勉強中なため、残念ながら読む事がまだできない。時間をかければ一文字ずつ読めない事もないが、そん

な事をしていれば朝日が顔を出して、再び引つ込めるくらいには時間がかかるだろう。

「…………お」

ヘステイアは《豊穡の女主人》を見付けた。ブニと出会う前のじやが丸くんを売っていたあの時では到底入る事ができなかったが、今ならばそんな悩みもない。食事量の多い冒険者も満足できる量で味も旨いのならば、自分とブニの胃袋もきつと満足させてくれる筈だ。

今日はここにしよう。そう決めたヘステイアはブニへと伝え、一度ホームの廃教会へと戻って着替え（重ね着）てから向かう事にした。

現在豊穡の女主人では、団体客の皆様であるロキファミリアの対応で大忙しだったが、ようやく一段落ついたのだが、それも束の間、店のドアを開ける音が聞こえた。一

息つこうと思つてたのにと苛立つが、相手は金を落とすお客様。きちんと丁寧な対応をせねばなるまい。

「いらつしやいま……せ……」

ただし、それは想定内の範囲内のお客様とする。

「と、とんでもねえ成金と一人で動く鉄の人形が来たニヤ……」

アーニヤが驚愕の表情でつい口に出してしまった。さて、ヘステイアとブニは着替え（重ね着）で豊穣の女主人に來た訳だが、ここで二人の格好を説明しよう。ヘステイアはフルドレスシリーズで金色の裝飾が施された白いタキシードのようなキラキラした格好であり、ブニは何故かアーティアシリーズである。もう一度言おう、アーティアシリーズである。何故か歩く度にガチョンガチョン音がするし、動く度に駆動音がする。モンハン界ではこのような事はなかったが、これも世界が違う影響だろう。ちなみに店にいた者達は聞いた事のない音に全員が二人を見て驚愕の表情で固まっている。

「ほらブニくん！やっぱり僕の言う通りじゃないか！もつとちゃんとした格好がいいつて！皆驚いているよ！」

「■■■■■■■■■■……■■■■■■■■■■、■■■■■■■■■■？」（やはりアーティアではマズかったか。……しかし、驚いているのは神ヘステイアも原因では？）

「いやまあ僕も原因だけど、間違はなくほぼキミだからね？」

しかもブニの声もどういふ訳かノイズ混じりの謎言語(モンハン語)となっており、よりロボット感が出ている。

(え?ヘステティア?ヘステティアなの?え?え?何がどうなってそんな立派に?あと鉄の人形の格好をした彼は何なの?魂が正に大自然っていう感じで光り輝きすぎて目が痛いんだけど)

シル・フロロヴァの中身ことフレイアはブニの魂に逆にダメージを受ける始末。

「はっ?えっ?ど、どちっ、ドチビイイイイっ!!!?」

そして驚愕するロキ。豊穡の女主人は瞬く間に混沌に呻く事になった。

「うん?ああ、なんだロキか。どうしたんだい、そんなプケプケが撃龍槍を食らったような顔をして」

「何やその訳わからん例えは!?てか何やねんその格好!!あと隣の奴ウー!」

「これかい?これはフルドレスと違って、まあちよつとしたチケットと交換できる衣装さ。あと隣の彼は僕の眷族だぜ」

ドヤ顔でポーズを披露するヘステティア。それにイラツと来たロキは「ドチビのくせにいい!」と飛び掛かった。いつもならロキがヘステティアの頬を引っ張って取っ組み合いになり、ヘステティアの胸で精神的なダメージを受けて終わるのだが、残念ながらここにいるヘステティアはハンターである。ヒョイツ、と最小限の動きだけで回避し、その

ままロキを組伏せてしまった。

「へっ?」

「ふっ、今までの僕とは違うんだよロキ」

渾身のドヤ顔のヘスティア。ロキは何が起きたのか少しの間ポカンとしてしまったが、理解するや否や釣り上げられたガノトトスのように暴れるが、ハンターとなったヘスティアの脅力の前のではびくともしない。

「ぐおおお! 離せやドチビのくせにいいいい! いや力強すぎひん!!」

「まるで赤子のような力だねえロキ。よいしょつと」

「ぐえっ!!」

ヘスティアはそのままロキの上に座り込むと、高笑いを始めた。尚、ヘスティアの格好はフルドレスではあるが、中身はゴールドルナシリーズのままなので…

「かひゅっ……こひゅっ……お、おもっ、たっ……ひゅうっ……!」

ロキが呼吸困難になるのも致し方なしである。ブニはブニで頑張つて覚えた拙いオラリオの言語で「ニメイ……おネガイ……します」と偶然一番近くにいたアーニヤに話しかけており、アーニヤはアーニヤで「聞き取りづらいけどこいつ喋るニヤツ!!」と驚愕しつつも席に案内した。

早速ブニはメニニュー表を手に取りにらめっこを始める。しかしやはり読めない。文

字に関してはまだまだ勉強不足。もういつその事全部頼んでしまおうか。大丈夫、ハンターとなったヘスティアと一緒に食べればいける筈だ。

「メニユー……ゼンブ……クダさい」

この台詞と共に大量のヴァリスが入った大きな袋をカウンターに置き、店主ことミア・グラントを見る。ミアは少しばかり呆けてしまったが、直ぐに笑みを浮かべると「あんた達大仕事だよ！ さつさと動きな！」と店員達に指示を出して自分も料理を作る。これは期待できそうだ。ブニはそう思つてアーティエアの下で笑みを浮かべた。

「とりあえずこれでも飲んで待つてな！」

ドンと置かれたのは酒。ブニ…というよりハンターはどんだけ強い酒でも9杯は問題なく飲み干す事ができるが、10杯目を飲んで立ち上がるとグロツキー状態になる。とは言えその場で暫く動かなければ直ぐに復活する恐ろしい回復力なため、実質ザルとでも言えよう。もしくは誰かと会話しても一瞬で復活する。だが逆にどれだけ弱い酒でも10杯飲んで立ち上がるとグロツキー状態になるのは摩訶不思議だ。

「よいしょつと」

ロキをボコして満足したのか、ヘスティアはブニの横に腰掛け、酒の入ったジョッキを手に取るとブニに向けて笑みを浮かべる。

「それじゃあブニくん、かんぱーい！」

「■■■■■■■■■■!」(かんばい!)

互いにジョッキを掲げて一気に飲み干す。尚この時ブニはアーティアを外しておらず、鎧の上から飲んでいる。ハンターにとつては必須スキルである鎧の上から飲食するという行為は、ハンターではない者達から見れば驚愕ものだ。

「■■■■■■■■■■?」(ところで神へスティア、先程の知り合いらしい赤髪の女性は?)

「大丈夫、死なない程度にボコした」

チラリと振り返れば、そこには麻痺したハンターのような動きをするロキを呆れ果てた顔で回収している冒険者達がいた。こちらの視線に気付いたのか、一人の金髪の少年が苦笑いを浮かべながらへスティアに近付いた。

「ロキが失礼をしました。僕はロキファミア団長のフィン・デムナと申します。何かお詫びをしたいのですが……」

「ん? きみはロキのこの子かい? 別にお詫びなんていいよ。むしろスッキリしてるからね!」

グツと親指を立てて良い笑顔で返すへスティアに、フィンは「そう言って頂けると助かります」と返答をして頭を下げた。それはそれとしてこのような少年が団長!? アーティアの下で驚愕の表情を浮かべていた。残念ながらブニはまだ種族の違いの見分け

が微妙であり、ドワーフとパルウムとヒューマンの違いが分からない。エルフと竜人族は手の指の数で判断できるのでいいのだが、ドワーフっぽい体格の輩はモンハン世界にもいるし、ヒューマンとパルウムの違いって初見じゃまず分からないだろう。

恐るべしファンタジー。モンハン世界も充二分にもファンタジーなのを棚に上げて、ブニはそう思った。